

イフラ東京大会見聞記

農学部 藤 本 哲 生

イフラ東京大会に行ってきた。イフラというのは国際図書館連盟のことで、その第52回大会に参加したわけです。それだけでなく人も多い東京に世界中（60数カ国）から、図書館人が集って一大祭典を開催したのです。いやそうだろうと、やや甘く考えて参加したのですが、実際はなかなかシビヤーでした。こういう大会は、つまるところスピーチが集中したもので、それを聴いて触発されたり、多くの人々と知り合いになるのが目的だと思うのですが、なかなか充実した実のある話しが聴かれ、非常に結構でした。

まず初日24日のことから始めましょう。10時から登録が始まりますので、9時すぎに宿を出て、会場の青山学院大学めざして、地下鉄銀座線表参道駅で降りて、地上に出ると私の前方に異国人（とつくにびと）が数人何やら「この方向で大丈夫かな」という不安げな風情をただよわせながら歩いています。ひょっとすると御同業人＝図書館人かなと横目で見ながら追い越して、大学の正門のところまで来ると、IFLA 関係の標識が一杯たててあり、その指示通りに行くと、登録センターです。登録はスムーズにいき、チケットと交換にバッグに入った関係書類一式をもらいました。名札（ネーム・タグ）が大切なもので、期間中ずっとこれを胸につけておかねばなりません。これがあれば、国立劇場での開会式にもフリー・パスですが、なくしたら、ダーメン・ヘレンとなるとおどされました。書類等は大会プログラム、参加者リストが主なもので、その他にもいろいろ入っていました。展示会レセプションは、ホテル・ニュー・オータニで夕刻6時半から始まり、展示会場と同じ場所ですので、展示を見学しながら歓談するわけです。慶応大の大沢典子さんの司会でレセプションは進行し、8時まででありました。挨拶の中で「今日の一般見学者はすでに1200人位

で、レセプション参加者が1300人位なので、一日の見学者としては従来のどの大会よりも盛況だ」ということでした。この展示会そのものについては別掲予定の記事によることにします。

約180の部会、分科会等がありますので、一人で参加できるのはごく一部ですから、京大参加者で手わけして各々自分の興味のある分野に限定し、発表のテーマ、発表者により選択しました。論文や著書でその名前を知っている人、例えばロバート・ヘイズのような人を特に選びました。

さて25日（月）午前中は、このヘイズさんの講演に行きました。ベッカー & ヘイズで有名な人で、私にとってはその著書『情報の蓄積と検索』が情報検索の世界へ導いてくれた人ですので、どういう顔をした人かと興味しんしんでした。眉毛の白い偉丈夫でした。彼は自分のペーパーが既に聴衆に配布されていると思ったらしく、それにコメントを加える形で話したいと切り出し、聴衆からもらっていないと異議が出、司会者からはすぐに配布する旨のアナウンスがあったにもかかわらず結局配布されず、なにかいらいらした雰囲気でした。同時通訳がついていますが、一方の耳では英語が、他方では日本語が同時にはいってきますと頭の中で混乱しましたので、無理をして英語だけで聴きました。彼の所属する UCLA の GSLIS（図書館学校）でのプロジェクトの説明でしたが、その調査研究成果が今後の図書館教育に及ぼす影響については触れられず、スピーチの題名から期待したほどのものではありませんでした。

午後2時から国立劇場において開会式と全体会議がありました。皇太子と同妃殿下が来駕されました。私は2階の3列36番という良い位置で両殿下の真正面でした。皇太子殿下の挨拶は実のあるもので、「日本は出版量が多い割に、図書館が発達していない。個人が自分で本を買うせいかもしれ

れないが、この大会を機会に……」と述べられました。全体会議のスピーチの第一は、学術情報センター長、猪瀬東大工学部教授の「学術情報システムー統合された情報ユーティリティへの挑戦」と題するもので、スライドを映しながら英語で発表されました。日本人の話す英語は割と聴きとりやすいものです。今、日本がめざしている統合された学術情報ネット・ワークの基礎になる考えが系統的に述べられました。雄大というのが印象です。他に2件の講演がありました。

この全体会議の終了後、場所をホテル・ニュー・オータニに移して、都知事招待の歓迎レセプションがありました。実に華やかなもので、音楽の生伴奏つきで、クラシックとジャズが交互に流れました。意外にもこのレセプションにも両殿下が出席され、外人は特に喜んでいました。私はこの場で、非常な幸運にめぐりあいました。西独のE・プラスマンさんに会えたのです。“Bibliothekswesen in der Bundesrepublik Deutschland” (2. Aufl.) の共著者の一人で、参加者リストにはその名前が載っていませんでしたが、この会場で何人かのドイツ人と話しをしていて、彼がこの会場にも来ていると知って驚きました。何人かが探してくれたのですが仲々みつからず、半分あきらめていたときにひょこっと会えて30分位おしゃべりをしました。彼の著書を独語で読んだと言うと喜んでくれ、彼が持って来っていた英訳本の目次を出して説明してくれました。私も目次に即して、図書館関係機関の説明を求めたりして、あっという間に時間がすぎ、明日又会おうと約束して別れました。21才の息子さんを同伴して来ているそうです。

第三日26日(火)は、昔とった杵柄というわけ、国際法律図書館協会 (IALL) I に出席しました。発表者が日本人の弁護士さんと最高裁図書館の小野孝正さんのを聴きました。2人共英語で発表されました。「日本法の解釈・運用—実務家の視点から」と「日本法の調査研究、書誌・索引」と題するものです。後者は日本法に関する欧文文献のリストを配布して、それに解題を加えるというものでした。その文献の中に京大法学部の

北川善太郎教授編の *Doing Business in Japan*, Vol. 1-10, 1980-1981, Mathew Bender 社刊が best book としてコメントされたのは嬉しかった。教授がこの本を編集されていた頃の御苦労を少しは知っています。又ポール・オイベルの *Das japanische Rechtssystemen*, 1979 も載っていて、彼が研修員として京大に居たころ知っていたし、今大阪ドイツ文化会館の館長として在日している旨きいてるのでなつかしい名前でした。この IALL I は一日中あるのですが、一日中つきあうわけにもいかず、席を移して、LIBER パネル・ディスカッションを聴きました。「英国の極東コレクション」と題して British Library の B. C. ブルームフィールドさんがまず話され、配布された資料そのままのスピーチで内容もきちっとしたものでした。次にスウェーデンの L. フレデリクソンという人が「スウェーデンの東アジア・コレクション」と題して話したが、猛烈な早口の英語でスピーチをし、その上配布資料には全然即さないもので、ところどころしか理解できなかった。最後に西独・国立プロイセン文化財団図書館のヘルガ・ドレスラーさんが配布された英文資料にのっとり話した。彼女はかつて京大文学部で野間光辰先生のもとで雨月物語を研究した女性で、ブロンドの髪とゲルマン人らしい雄大な体格をした日本語ペラペラの人です。「ドイツ連邦共和国の図書館に於ける東アジア書籍」と題して、歴史的概説と現状とをとうとうと述べ、さすがに途中で声がやや小さくなりましたがエネルギーな話しぶりでした。三つの発表の後で、Q & A があり、2番目のスピーチに質問や反論が集中した。私の後ろにいたフィンランド女性は、「あなたは国々の友好云云と言ったが、甘い。例えばロシアのツアーは征服の目的で東アジアの資料を収集した」旨の議論をふっかけ、発表者は閉口した風情でした。ローマ字翻字の問題にも反論があり、かなりはげしいやりとりがかわされ、予定の12時半には終了しませんでした。原語を付加すべしというのが反論のようで、発表者は、「ヨーロッパにはヨーロッパの立場があり、アメリカとは違う」旨答えていたようです。

私は1時に、昨夜約束したプラスマンさんと会い、食事に行きました。道中や食卓でもいろいろ話しをしました。3時からのカルトヴァッサーさんの発表を2人共聴く予定なので、それまでの時間、彼の著書 *Bibliothekswesen* について巻末の索引のアルファベット順によく分らない用語について質問しました。例えば *Bibliothekstantieme* という用語などは独和辞典などをひっくり返してもよく分らなかった言葉でしたが、彼に説明してもらってはじめて分かりました。順々にやったので、Fの途中までしかはかどりませんでした。

3時からの発表者カルトヴァッサーさんは、バイエルン国立図書館長というドイツ図書館界の大物で、その名前位は私も知っていました。配布資料は本文だけでも12枚あり、ゲートからの引用に始まり、ヒデルスマイヤーやウンベルト・エコーの文章が引用される格調高いものでした。「電子式データ処理時代における現代情報化社会の危機」と題するもので、「私は自分の呼び出した精霊をもはや退治できない。それをコントロールする魔法の呪文を忘れてしまったから」というようにならないよう、と情報化社会における危険について話された。コンピューター犯罪とかデータ保護のように今日すでに明白になっている個々の危険より、次の二つの包括的な危険について議論され、「情報の過剰生産による窒息」と「新技術による情報かくし」に分けて詳論がありました。要約するのはむづかしいので、これ以上は触れません。配布英文資料と申込んだ独語資料がありますので、関心のある方は私まで御照会下さい。

さて実質的な最終日(28日はツアー、29日は閉会式)である27日(水)は、収集・交換分科会Ⅱの西独 DFG のレオナードさんの「ドイツ学術振興会の出版物の交換—ドイツ連邦共和国における中心的な任務としての灰色および専門文献の収集に関する合理的プログラム」と題するスピーチを聴きました。ドイツの学振は日本のと異なり、はるかに大きな財政力をもった団体で、図書館活動にも関心が強く、大学図書館へも多額の援助をしています。自ら文献の収集にもあたっているのです。交換でなければ入手できない、いわゆるグ

レイ・リテラチャーには、私達も困っていますので、こういう機関があってその入手に努力しているのが、うらやましく感じられました。

ソニー社の宮岡千里さんの「光ディスクの図書館への応用」と題する発表を聴こうと会場にかけたところ、午後1時からに変更ということではがっかりしました。ペーパーは申込みました。

次に図書館史ラウンドテーブルに出、岡崎義富、河井弘志さんの発表を聴きました。

GID のワッテンバークさんのマンションでおしゃべりをするから来いと急に誘われて、予定していた午後1時からの大学・調査図書館分科会Ⅰの松村多美子教授と根岸正光教授の発表は聴けませんでした。私達に一番関心のあるテーマですから他の京大からの参加者が聴いてくれたことと思います。ワッテンバークさんのところで、ドイツの図書館学や図書館事情に関心をもつ者が、情報交換のためのグループを作らないかという旨の提案があり、自己紹介やおしゃべりをしました。ドイツ側の出席者は、ワッテンバークの他、今日発表したレオナード、ドレスラー、アウグスブルク大学のF・フランケンベルガー、ケルン大学のプラスマンたちで、お互いに協力していこうと当然のこととなりました。ワッテンバークの発表「科学雑誌と電子出版物の動向」は聴きたかったので、会場に駆けつけました。ちょうど間に合いました。米国の現状、ヨーロッパの現状、日本の現状について要所をおさえた発表でした。日本の現状については、我々も知らないことが調べられていて、驚きでした。Q & A になって、司会者がいくらうながしても質問もコメントも出ず、「今晚の“日本の夕べ”に行きたくて、うずうずしているのでしょう」というユーモアある締めくくりの発言で、発表者に2度ほど盛大な拍手を送りました。

皆の期待通り、「日本の夕べ」(日本青年館で開催)はすばらしいものでした。特に鼓童の太鼓は大人気で熱烈な拍手でした。私もテレビで観たことがあるので、期待していたのですが、それ以上でした。こういうものは生にかぎります。迫力がピンピン心臓に響いてきます。構成も立派でし

た。小太鼓と大太鼓のアンサンブル、鬼太鼓の力強さ等、すばらしいの一語につきます。

この日で大会は実質的には終わったわけですよ

で、私の駆け足の見聞記もこれで終わらせてもらいます。なお一言、私達を参加させて下さった京大関係者の皆様にあつく感謝いたします。

イフラ東京大会「国際図書館情報総合展」を見て

数理解析研究所 隅 田 雅 夫

毎年8月国際図書館連盟の世界大会が北米、ヨーロッパを中心に開催されているが、今回初めて日本で（アジアでは2回目）開かれ、参加する機会を得たので、大会と並行して催された展示会「国際図書館情報総合展」について簡単に報告する。

この展示会は8月24日より4日間の日程で、会場はホテル・ニュー・オータニ、有料で一般にも公開されたが、4日目のニュースでは最終的に1万5千人をこえるだろうと言われるほどの盛況だったようだ。初日午後1時半からオープニングし、テープカットが行なわれた。（写真参照）

出展者はリストによれば約100社にもなり、そのうち4分の1が海外からのものである。図書の出版、印刷、取次などの各社、書店、古書店、図書館機器、マイクロ写真、コンピューター関連の技術やシステムのメーカーやディーラー、内外の図書館関係を含む種々の団体や協会とその広報機関など多岐にわたる内容で、そのほか実演を含む和紙の製造、和装本の修復、浮世絵版画の刷り工程など特に外国人を意識した出展もあった。

展示会では時間の制約もあり、情報処理技術や図書館システムを中心に見学した。したがってここでは他のことについてはふれていない。はじめての世界大会ということで、この分野での外国からの出展を期待していたが、国内取扱いのものを除けばわずかに2件、OCLCとCLSIであり、しかもCLSIはパンフレットの配布のみであった。OCLCでは、CJK (Chinese/Japanese/Korean) 端末による漢字処理の実演があり、他に東京、大阪でもシステムの説明会を開いている。

まず第一に印象に残ったものは、やはり国内で

一堂に会するのは初めてといわれたCD-ROMであろう。CD-ROMとは、レコード屋で売っているコンパクトディスク（CD）と同じようなもので、ディスク上には音楽信号ではなく、コンピューターで扱える文字などデジタルデータがはいっており、PC-9801などのパソコンに接続し周辺機器として使う。しかし、音楽を聞くのと同様、すでに入力済のデータを読みとるだけ（ROM: Read Only Memory）で、データの書きこみや修正は今のところできない。あの小さな円盤に550MBもの大容量（パンフレットによれば英和辞典100冊）をもっているうえに、複製の費用が安価なことから、オフラインデータベースや電子出版のメディアのひとつとして最近急速に注目をあびているものである。

今回も、百科事典、用語事典、職業別電話帳などのデータを検索していたが、前二者はすでに市販されている。さらに音声や映像とも組合せて、ひとつのCD-ROMにしたものも試作品として紹介されていたが、教育用などに期待されているという。なお、CTS方式（Computer Typesetting）

